

外来種が絶滅危惧種を救う？

絶滅危惧種ノグチゲラが分布回復

ノグチゲラは、世界自然遺産候補地の沖縄島北部やんばる地域の森林にのみ生息するキツツキの固有種で、分布域も限られ、絶滅危惧種にランクされています。ところが2012年以降、これまで観察されていなかった人里近くの若い林でノグチゲラの営巣が頻繁に観察されるようになってきました。なんと、その原因が外来種だと分かりました。

外来樹木の枯れ木が増えた

ノグチゲラの営巣木を調べた結果、そのほとんどが外来樹木のハンノキでした(図1)。この木が枯れたのは(図2)、2010年に外来昆虫のタイワンハムシ(図3)が大量に発生したためです。ハンノキは成長が早く、ノグチゲラの営巣可能なサイズの木も多く、その立枯れ木がノグチゲラの営巣木として役立つのです。

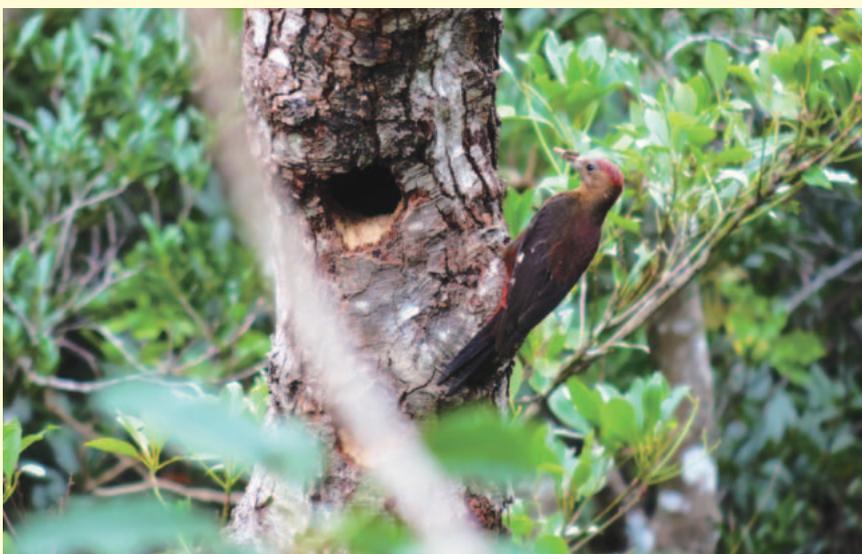
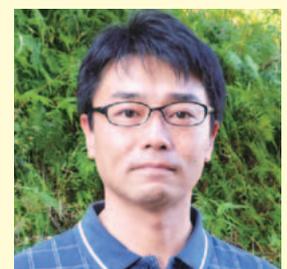


図1 ハンノキの枯れ木に営巣するノグチゲラ



小高 信彦
九州支所 主任研究員



さらに、営巣したハンノキは、利用されなかったハンノキよりも柔らかく、ノグチゲラが掘りやすい柔らかい枯れ木を選んで巣作りしていることが分かりました。2010年に枯れたハンノキがサルノコシカケなどの木材腐朽菌によって分解され、2012年にノグチゲラの営巣にほどよい柔らかさになったと考えられました。

若い林でも枯れ木が発生すればノグチゲラは営巣することが分かりました。ただし、一斉に枯れたハンノキは近い将来腐って倒れてしまうことが予測されます。ノグチゲラの回復が見られた生息地で、ハンノキの枯れ木が無くなった後もノグチゲラが暮らし続けることができるか、監視が必要です。

生態系を管理する

今回の結果はノグチゲラの生息環境保全に役立つとともに、生態系の管理には生物間の相互作用を良く知り、それを利用することが必要なことを教えてくれました。

参考文献

小高信彦 (2013) 木材腐朽プロセスと樹洞を巡る生物間相互作用：樹洞営巣網の構築に向けて
日本生態学会誌 63:349-360

小高信彦 (2013) ノグチゲラによるハンノキ立枯れ木の営巣利用：沖縄島へのタイワンハムシの侵入と大発生の影響について 九州森林研究 66:77-80



図3 ハンノキをはじめとするカバノキ科の葉を主食とするタイワンハムシ

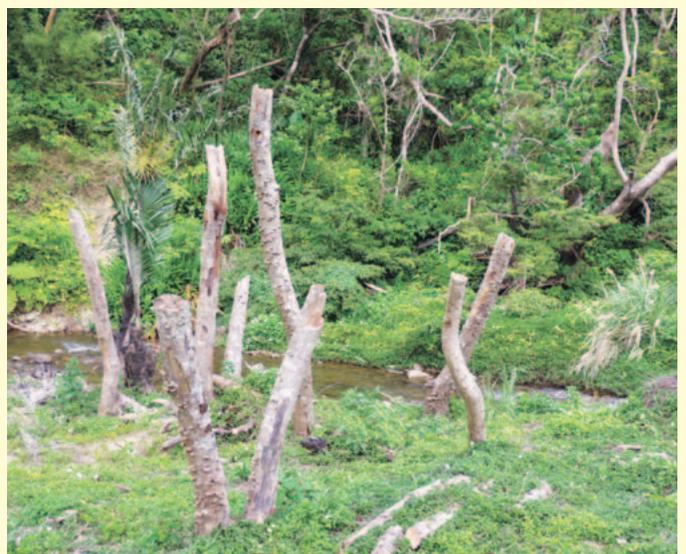


図2 タイワンハムシの食害後に大量枯死したハンノキ